

ニクソンの「チャイナ・イニシアティヴ」

石 井 修*

- I はじめに
 - II アジアを向いたニクソン
 - III 「チャイナ・イニシアティヴ」の始動
 - IV 「チャイナ・イニシアティヴ」の本格化
 - V “POLO” I
 - VI 「ショック」I
 - VII 台湾の反応
- あとがき

I はじめに

1971年、72年の米中和解についてはすでに夥しい数の著書や論文が発表されている¹⁾。しかし、わが国において、米国政府の公文書を利用したこのテーマに関する研究は未だ殆んどなされてはいないのではないだろうか。本稿の目的は公開された「ニクソン大統領文書」²⁾をもとに、1971年7月15日（米国時間）のニクソン訪中発表にいたる過程をとくに日本へのインプリケーションを念頭に置きながら辿ることにある。

II アジアを向いたニクソン

「米中和解」「米中接近」の国際政治構造に与えたジオポリティカルなインパクトや、冷戦構造下での米国の“覇権”維持にとっての意味合いはすでに多く語ら

『一橋法学』（一橋大学大学院法学研究科）第8巻第3号2009年11月 ISSN 1347 - 0388

※ 一橋大学名誉教授

- 1) 初期のものとしては、著名なジャーナリスト兄弟の手になる、かなり正確で大変面白く読ませる著書がある。殆んどインタビューに拠ったものと思われる。Kalb and Kalb (1974)。同じくインタビューによって書かれた英人ジャーナリストの興味深いものもある。Brandon (1972, 1973)。最近の研究者の手になるものとしてはDallek (2007)。
- 2) The Nixon Presidential Materials Project at the National Archives II, College Park, MD.のことを指し、以下一次資料はすべてこの中の文書を使用しているが、必要があればNPMPと略記して表示する。

れているので(本稿のスペースの関係からも)敢えて触れないことにする。その代りに、これまであまりにもパワーポリティクスに偏って論じられてきた観のあるニクソン米大統領の「チャイナ・イニシアティヴ」³⁾を別の視点から少し考察してみたい。ニクソンの抱いた“チャイナへの憧憬”とでも呼ぶべき、感情的・情緒的側面である。それは建国当初から貿易船と宣教師が米国人のなかに作り出した“夢”とも共通するものであった⁴⁾。

換言すれば、この視点を完全に無視すると、国際政治経済構造の急速に変動した1960年代末から70年代初めよりもずっと以前から——ある論者⁵⁾によれば、1959年から——ニクソンの胸中には米国の対中政策転換(少なくとも穏やかなテンポでも)への願望が秘められていた事実が説明できないのである。

ニクソン大統領のスピーチライターで、そのあと『ニューヨーク・タイムズ』の保守派コラムニストとして名を馳せることになるサファイア(William Safire)は回顧録の中で次のように書いている⁶⁾。

「ニクソンはいつもチャイナへ行くことを夢見ていた。カリフォルニアで生まれ育ったかれは、太平洋を目の前にし、大西洋やヨーロッパではなく、アジアへ顔を向けていた。太平洋戦争に従軍し、50年代、60年代には朝鮮とヴェトナムがかれの注意をアジアへ向けた」「チャイナはニクソンを魅了していた。その神秘性、不可解性、そして、かれにとって政治的・外交的地平を開いてくれるかもしれない可能性ゆえにであった。」

英国のジャーナリストから政治家に転身したエイトケン(Jonathan Aitken)はニクソンの伝記で次のように記している⁷⁾。

「ニクソン副大統領の極東旅行[1953年夏]は、生まれてから太平洋の彼方に惹かれていたことと大いに関係している。かれのカリフォルニア的なもの、アジア系児童と机を並べて初等教育を受けた事実、太平洋のソロモン群

3) 1971年7月15日にいたる過程は、[ニクソン大統領文書](NPMP)では“China Initiative”の用語が多用されている。

4) Mann (1999) 8.

5) Brandon (1972, 1973) 181-182.

6) Safire (1975) 366.

7) Aitken (1993), 225.

島で戦ったこと、などが極東へのニクソンの好奇心を刺激した。」

1972年8月の軽井沢での田中角榮総理との会談で、キッシンジャーも同じような証言をしている⁸⁾。

「戦後の時期、米国がかなりの程度欧州志向だったということは、多分その通りでしょう。しかし、この大統領はカリフォルニア州出身で、アジアをしばしば旅し、とてもアジア志向です。そして、恐らくどの国よりも一番多く日本を訪問しているでしょう。」

最後にニクソン自身の口から言わせよう⁹⁾。ヨーバリンダというロスアンジェルスの片田舎の決して豊かとは言えない家庭に育った幼少期の回想である。

「そしてそこには子供の想像力を掻き立てるものが沢山あった。太平洋を西へ向って覗き見ること…昼間は蒸気機関車の煙を見ることができた。夜にはときどき列車の汽笛で目を覚まされることがあった。そのあと、いつか訪れてみたい、遠く離れたいくつもの場所を夢見るのだった。」

副大統領を8年間務めたあと、野に下り、ペプシコーラの顧問弁護士を務めた。その間仕事で何度も来日した。ライシャワー（Edwin O. Reischauer）米駐日大使は1964年3月に精神異常の少年に右腿を刺されたあと、輸血による肝炎で東京・虎の門病院に入院していた。このときニクソンはライシャワーを見舞ったが、その後しばらくして、大使執務室へわざわざ電話を入れて、米国は「チャイナ」の承認に踏み切るのが望ましい、と主張した。そのことがあったために、のちにニクソンがそれを実行に移したときもライシャワーは少しも驚かなかった¹⁰⁾。

ニクソンは一市民にすぎなかったが、元副大統領であったがゆえに、米国の在外公館その他でVIP待遇を受けた。1965年と67年にも外遊しているが、そうした折に自分の対中観を吐露している。大統領選挙を翌年に控えた67年には選挙を視野に入れて、4度にわたり海外を旅した。このときポーランドからは入国ヴィザを拒否されたが、ルーマニアからは入国を認められたばかりか、街頭の市民か

8) Memorandum of Conversation Saturday August 19, 1972 9:20am ~ 12:25am Mampei Hotel Sakura-no-Ma Room Karuizawa Nagano Prefecture Japan Tanaka Visit (Hawaii) Aug 31-Sept 1, 1972 VIP Visits NSC Files NPMP.

9) Nixon (1990) 3.

10) Reischauer (1986) 264.

ら暖かく迎えられた。チャウチェスク (Nicolae Ceausescu) 共産党書記長と長時間の会談も行った。この会談でニクソンは、もし8億の人間を怒れる孤立状態に置いておくと、20年のうちに中国¹¹⁾は世界平和に重大な脅威を与えると語った。同じ年ニクソンは日本で佐藤榮作総理や岸信介元総理など、そして台湾で蒋介石 (Chiang Kai-shek) 総統とも会談を行った。ニクソンは蔣が依然大陸反攻政策にしがみついているその非現実性に啞然とした。このほか、欧州や中南米にも旅した。これらの旅行を踏まえ、そしてかれのスピーチライター兼補佐官であるプライス (Raymond Price) の助力を得て、『フォーリン・アフェアーズ』誌に「ヴェトナム後のアジア」を発表し、チャウチェスクへ語ったと同じ内容に加え、中国自身が変身する必要性を盛り込んだがあまり注目されなかった¹²⁾。

1968年大統領選挙の最中、英人ジャーナリストが、ニクソンに対して、中国封じ込めのために、ソ連と結託することを望むかと問うたところ、ニクソンはそれは米国の政策が人種偏見によるものとの印象をアジアに与えかねないので不賛成だと答えた。同じく選挙戦中に、「もし彼ら [北京政府] がヴィザをくれるなら、北京へ旅するかもしれないよ」と側近に漏らしている¹³⁾。

しかしながらその一方で、政治家ニクソンは、1958年の台湾危機、1960年の大統領選挙戦中、また1964年などに対中強硬発言を繰り返してきた¹⁴⁾。

Ⅲ 「チャイナ・イニシアティヴ」の始動

1969年1月20日正午に就任式が行われ、米国の第37代大統領が誕生した。11日後の1月30日にニクソンは中国に関する興味深いインテリジェンス・リポートを読んだが、翌日の2月1日、キッシンジャー補佐官に対中「ラプロシュマン」(和解)のあらゆる可能性を探すよう短いメモで指示した。その4日後、NSCに対して「NSSM 14」(2/5/69付)の形で正式に検討を命じた¹⁵⁾。

キッシンジャーは欧州やソ連の専門家でアジアへの関心も知識も欠如していた

11) 以下、「中華人民共和国」を「中国」、「中華民国」を「台湾」と略称する。

12) Mann (1999) 16-18; Nixon (1990) 280-284; Nixon 論文 (1967); Kissinger (1979) 157-158; Hoff (1994) 195-196; Kalb and Kalb (1974) 218.

13) Brandon (1972, 1973); Kalb and Kalb (1974) 219.

14) Hoff (1994) 196; Haldeman (1978) 91.

ので、大統領の「チャイナ・イニシアティヴ」を“夢物語”と感じた。キッシンジャーの日本についての無知は自ら認めるところであるが、佐藤総理の密使としてキッシンジャーとの交渉にあたった若泉敬・京都産業大学教授は「愕然とした」と述懐している。1969年1月の時点で、キッシンジャーは「日本に特別の関心もなく、沖縄がどこにあるのかさえ恐らく正確には知らないような状態であったと思われる」と¹⁶⁾。後述するように、69年夏にニクソンは世界一周の旅に出た。途中、大統領専用機「エアフォースワン」の機内で次のような会話が交わされた。「あのね、かれ〔ニクソン〕は2期目が終わるまでには中国を訪問すると真剣に考えているよ」とホルドマン（Harry Robbins “Bob” Haldeman）大統領首席補佐官がキッシンジャーに伝えたところ、キッシンジャーは薄笑いを浮かべて、「可能性は殆んどゼロ」と応じた。自分の側近ヘイグ（Alexander M. Haig, Jr.）准将にも、ニクソンの「現実離れ」をどうしようもないという仕草で表わした¹⁷⁾。

米国の対外戦略（とくに対中戦略）について、ニクソンとキッシンジャーとの立場を「発案者」（architect）と「実行者」（implementer）、列車の「機関士」と「いやいやながらの乗客」、「先導者」と「追隨者」、さらには「プロフェッサー」と「学生」—などと、関係者や歴史家はさまざまに譬えている¹⁸⁾。

これらの比喩は多分、歴史的事実の一面を伝えていると思われる。しかし、キッシンジャーは自分の外交構想の中心に絶えず据えられていたソ連に対して中国が圧力として働くことに気付いていた。またキッシンジャーの次の発言（69年5月）を読むと、ニクソンの「ロマンチスト」に対してキッシンジャーの「シニク（cynic）」、キッシンジャーはニクソンの先のさらにその先を見越していたとも言えるかもしれない。キッシンジャーは21世紀初頭の今日の中国、米中関係を予言したかの如き発言をしているからである¹⁹⁾。

-
- 15) Safire (1975) 368; Kalb and Kalb (1974) 219-220; Hoff (1994) 196-197; MacMillan in Logevall and Preston (2008) 113; Brandon (1972, 1973) 183; Haldeman (1978) 91.
 16) Mann (1999) 19-20; Haig (1992) 257; Kissinger (1979) 324; 若泉(1994) 173-174, 246, 250.
 17) Haldeman (1978) 91; Haig (1992) 257.
 18) Aitken (1993) 462-463; Kalb and Kalb (1974) 221; Haldeman (1978) 84-91; Hoff (1994) 109. See also Haig (1992) 204.

まず、キッシンジャーは米国外交が突然シフトすることには反対だった。

「たとえ弱く、内向きの中国であっても、その図体の大きさは近隣の小国に潜在的脅威となる」、米国にとっての問題は「比較的対外侵略性の少ない、孤立主義を維持する中国を変えようとするつもりなのか」ということである。「米国は中国が世界的強国として国際政治裡に立ち現れ、ソ連と同じように米国と競争することを本当に望むのか」[なぜ、中国を国際社会に引き込むことが必然的にわれらの利益になるのか]と。

とは言え、キッシンジャーはこのあとニクソンの命令に忠実に従った。例えば、中国専門家のホルドリジ (John Holdridge) やロード (Winston Lord) を国務省からNSCへ引き抜いた。ホワイトハウス内にキッシンジャーの強力な“NSCマシーン”あるいは“キッシンジャー・マシーン”が形成されていく。

当時、国交のない中国との唯一の接触点はワルシャワでの米中大使級会談であったが、これも断続的にしか行われていなかった。この会談は1955年8月にジュネーブで第1回目が開かれた。朝鮮戦争で捕虜になった米兵の釈放を実現させるのが差し当たっての目標だった。これは中断後、58年9月にワルシャワで再開されたが、その後、68年1月にまた中断された。70年1月に再開(第135回)されるにあたっては、米国のストッセル (Walter J. Stoessel, Jr.) 駐ポーランド大使がワシントンからの指令を受けて、かれのカウンタパートである駐ポーランド臨時代理大使の雷陽 (Lei Yang) に接触を図るのに苦勞する。やっと12月3日の夜にワルシャワの文化大宮殿で開催されたユーゴスラヴィアのファッションショーの終わったあと、後を追いかけることに成功したというエピソードはよく知られている [Mann (1998) 22-23]²⁰⁾。

翌年1月20日の第135回会談では、場所をワルシャワではなく北京かワシントンにおいて、台湾のみならず幅広く両国間の懸案について話し合おう、との米国側の提案を中国側は受け入れた。双方は、北京で閣僚級ないしは米大統領特使との会談の可能性も示唆した。翌21日の第136回会談でも同様なことが合意されて

19) MacMillan in Logevall and Preston (2008) 109; Minutes of the SRG Meeting 5/15/69 FRUS, 1969-1976, vol. XVII: 33, 36-37, quoted in 同 119. See also Haig (1992) 257.

20) Mann (1999) 22-23.

いる。国務省本省を通じたこの電文のなかには、中国側は米ソによる中国に対する敵対的共同行動（挟み撃ち）を恐れているとのコメントも入っている²¹⁾。この大使級会談はこの時点で役目を終えた。

ニクソン政権の「チャイナ・イニシアティヴ」で決定的な役割を果たすことになるのは、「パキスタン・チャネル」と「ルーマニア・チャネル」の2つである。この観点から注目すべきことは、69年夏のニクソンの海外旅行のなかにこの両国が含まれていたことである。7月20日に月面着陸に成功したアポロ11号は24日12時50分に太平洋上に着水した。ニクソンは宇宙飛行士を出迎えるべく23日に南太平洋へ飛んだ（この旅行は“Moonglow”（月の輝き）のコード名が与えられた）。「グアム・ドクトリン」が発表されたのはこの旅行の時である。ニクソンによれば、この旅行はキッシンジャーの最初の北ヴェトナム側との秘密会談の「完全なカモフラージュ」にもなった²²⁾。

ルーマニアの首都ブカレストには8月2日に到着。2年前にも勝る市民の大歓迎を受けた。通りで踊りを始めた群集もいた。前年にチェコスロヴァキアへのワルシャワ条約機構軍の侵攻により「プラハの春」が踏みにじられた後だっただけに、米国の大統領を最初に受け入れたルーマニアの人びとの勇氣にニクソンは特別の感動を覚えた²³⁾。

ニクソンの回顧録では、ブカレスト到着は8月2日とあるが、何故か、「ニクソン文書」では会談の日付は69年の8月2日でなく8月1日に行われたことになっている。中国に関連した会話部分は以下のとおりである²⁴⁾。

ニクソン—あと25年で中国は10億の人口を持つ、もしこの国が封じ込め

21) Amembassy Warsaw to Department of State 1/20/70 & 2/21/70 China Public and private moves toward a Presidential visit 1970-1971 For the President's Files-China/Vietnam Negotiations, National Security Council Files Collection (以下 NSCFC) Box 1031.

22) Nixon (1990) 394.

23) Nixon (1990) 395.

24) Aug 1, 1969 Memcon Nixon-Ceausescuの文書には中国関連部分 (pp. 7-13) しかファイルされていない。[Miscellaneous memoranda relating to HAK's trip to PRC] July 1971 For the President's Files-China/Vietnam Negotiations NSCFC Box 1033. 別に COOKIES II [Chronology of exchange with PRC] February 1969-April 1971 同上ファイル Box 1032にも収められている。

られた状態だと世界平和を破壊するような猛烈な爆発力となるだろう。

チャウチェスクー人口は〔いま〕8億で、1980年代には10億になるだろう。何世代も中国は隣国と戦争をしたことがない。

ニクソン—米国は、旅行制限の緩和などの措置をとっている。貴殿が米国と中国との間の仲立ちをしてくれれば有難い。

このときから1年後にニクソンは再び、パキスタンのヤヒヤ・カーン (Agha Mohammad Yahya Khan) 大統領とチャウチェスクとにホワイトハウスで会うことになった。10月24日は「国連デー」である。1970年のこの日は国連創設から25周年という節目の日であった。ニューヨークは日本からの佐藤榮作総理を含む多数の元首クラスの人びとが参集しそれぞれ祝賀のスピーチをした。そのうちの何人かはこの機会を利用して、ワシントンのホワイトハウスでニクソンと会談した。佐藤＝ニクソンの首脳会談は24日に持たれた。佐藤はこのとき繊維問題の解決の遅れを謝罪した。中国やヴェトナムのことで頭が一杯のニクソンにとっては佐藤ではなく、ヤヒヤとチャウチェスクとの会談こそが重要だったのである。

日付順に言えば、25日にヤヒヤと26日にチャウチェスクと、ニクソンはホワイトハウスでそれぞれ会談している。

ヤヒヤとの会談にはキッシンジャーも陪席した。会談録は通常のものどキッシンジャーの作成したものと思われるもの2通りのものがある。キッシンジャーのものの方がヤヒヤの人物評 (英国陸軍士官学校 Sandhurst の優れた産物) などもあり、内容もやや詳しい²⁵⁾。

ニクソンが米国内にはインドに肩入れするものが多いが、われわれはパキスタンを大切に思う、と言うと、ヤヒヤはパキスタンは米国が味方になってくれるまで四方敵に囲まれていた。それだけに米国との友好関係を大切にする。われわれは律義な国民だ、と応じた。次に、パキスタンの経済援助についてキッシンジャーが説明した。そのあと、ニクソンは閣下は北京へ行かれると理解しておりますが、と切り出し、ニクソンにとっての最大の関心事である対中和解の問題に

25) 前者は Miscellaneous Box 1033, 後者は COOKIES II Box 1032 にそれぞれファイルされている。

入る。

ニクソンは米国が中国と交渉を始めることは最重要である。(1)米国は他の国と組んで中国と敵対することはない、(2)米国は、秘密の話し合いのために大物大使を送る用意がある、と述べた。ヤヒヤは、これに対して、ニクソンの考えを中国側に伝えると約した。このあと話題は中東問題に移った。

一方、チャウチェスクは26日にニクソンと、そして27日昼食をとりながらキッシンジャーと会談を行った²⁶⁾。チャウチェスクのための晩餐会の席でニクソンが中国のことを初めて正式の呼称を用いてシグナルを送ったことは有名である。

1970年10月26日にホワイトハウスで行われたニクソン＝チャウチェスク首脳会談（途中からキッシンジャーが加わる）の中国関連の個所は概略次の通りである。

ニクソン—前回〔1969年8月〕の会談で米国が中国と会議を始めたいとの意向を示したが、これを中国側に伝えてくれたことを感謝する。われわれはワルシャワでの〔米中大使級〕会談がソ連に筒抜けなので、別のチャンネルをほかの国の首都に開設したい。

チャウチェスク—米中関係改善は国際社会に好ましい影響をもたらす。まず大事なことは中国の国連加盟である。

ニクソン—国連代表権の問題は、ご承知のように、米国のこれまでの台湾との結び付きがあるので、とても難しい問題だ。

チャウチェスク—ルーマニアは中国とは特別に友好的な関係を保っている。…ルーマニアが中国の国連支持を表明していることに対して周恩来から感謝状が届いた。…ルーマニアはこれまでにソ連に対して米中の良好な関係は望ましいと伝えてある。

ニクソン—米国はソ連、中国の両方とも友好的な関係になることを欲している。これら2つの国を互いに敵対させて操ろうとする気は毛頭ない。われ

26) ニクソン＝チャウチェスク会談議事録は中国関連の個所 (pp. 8-10) しかファイルにならない。COOKIES II Box 1032. チャウチェスク＝キッシンジャー会談録には2種類のものがある。1つはp. 2のみ。もうひとつは全3頁のものだが不完全に思える。いずれもCOOKIES II.

われはそれぞれと独自の関係を保ち、一方を他方に刃向わせようとする意図はない。

この翌日（10月27日）の昼に（おそらく食事を共にしながら）、ホワイトハウスに隣接した迎賓館のブレアハウスで、チャウチェスク＝キッシンジャー会談が30分間行われた。

会談の主要なテーマはヴェトナムとなった。それに続く形で中国問題に入る。

キッシンジャー—米国は中国と外交的コミュニケーションの場を作ることに大きな関心をいだいている。両国には長期的にみて、利害の対立はない。われわれは複数のチャネルを開設したい。もし中国側が閣下か貴国の〔駐米〕大使に何か伝言を託した場合われわれはこれを極秘扱いにする。

チャウチェスク—…中国に関しては今この会話を中国側へ報告し、もし中国側のこれへの反応があれば、これまでと同様に貴殿に伝達する。

IV 「チャイナ・イニシアティヴ」の本格化

実際に「パキスタン・チャネル」としてはヒラリー（Agha Hilaly）駐米大使（その妹はキッシンジャーのかつての学生だった由）が主としてその任にあたったがヤヒヤ大統領が決定的な役割を果たした。このチャネルが動き始めるのは69年10月頃である。「ルーマニア・チャネル」ではボグダン（Cornelieu Bogdan）駐米大使の仲介が重要だった。これら2つのチャネルが主要なものだったが、ほかにさらに少なくとも2つ存在した。ひとつは「オランダ・チャネル」である。ロッジ（Henry Cobot Lodge）を通じて、“Mr J. J. Derksen” 駐中国オランダ臨時代理大使が北京との秘密チャネルになることを申し出ている。キッシンジャーが回顧録のなかで「ヨーロッパの外交官」とだけ言及しているのが、この人物だと推察される²⁷⁾。1970年2月11日にキッシンジャーはこの人物をロッジとともにホワイトハウスに招いて、ニクソン大統領がワルシャワの公式のルートのほかのチャネルを設けたいと考えていることを告げた。ロッジはボストンの名家の出自。祖父は有名な上院議員。かれ自身も上院議員、国連大使、2度にわたる駐南ヴェ

27) Kissinger (1979) 688, 691.

トナム大使（1963-64年、1965-67年）を務めた。1960年の大統領選挙では共和党のニクソン候補の副大統領候補となったことでも知られている。“Mr. Derksen”は、70年12月1日にキッシンジャーの補佐官であるヘイグ准将に、自分とは別のチャンネルが出来たのか、と問うているが、このときまでには、かれはすでに御用済みになっていたようである²⁸⁾。

もうひとつは「フランス・チャンネル」であった。筆者はこれを映画に倣って、「フレンチ・コネクション」と呼びたい。2人の人物がかかわっている。ひとりにはウォルターズ (Vernon A. Walters) 少将、もうひとりにはサントニー (Jean Paul Sainteny) である。

“Dick”の愛称をもつウォルターズはこのとき米国のフランス大使館付武官という身分だった。ウォルターズは回顧録を著している。かれは1917年ニューヨーク生まれ。言語能力は天性のものと思われるが、6歳から16歳の間にフランスと英国のカトリック校に学ぶ間に母語である英語のほかに仏、西、伊、独の言語に堪能になったと書かれている。第2次大戦中から軍隊で通訳を勤めた。1972年にニクソンよりCIA副長官に任命され、76年に退官した。キッシンジャーは回顧録で北ヴェトナム政府要人のズアン・トイ (Xuan Thuy) に接触させるためにかれをバリの米国大使館付武官に任命したと記している。1970年5月にはキッシンジャーのバリ秘密和平交渉の相手役となるレ・ドクト (Le Doc-tho) と接触。キッシンジャーによればウォルターズは「わが方の見事な〔仏語〕通訳」であった。キッシンジャー訪中のときには、中国の駐仏大使である黄鎮 (Huan Chen) と密かに接触している。古くは、大佐のときにニクソン副大統領の1958年南米旅行でスペイン語通訳として同行している²⁹⁾。

サントニーは第2次大戦前にハノイで銀行を経営していたが、1945年にホー・チミンと知己であったためフランスを代表してヴェトナムへ派遣された人物であ

28) Memorandum for the President from Kissinger (2/5/70) “Henry Cabot lodge’s discussion with Mr. J.J. Derksen, Netherlands Minister Accredited to Communist China”; Memorandum for Kissinger from Haig (2/11/70) “Your meeting with Ambassador Lodge and Mr. Derksen, Wednesday, February 11, 1970 at 11:00am”; Derksen to Haig (12/1/70). いずれも Miscellaneous Memoranda Box 1033.

29) Walters (1978); Nixon (1990) 187; Kissinger (1979) 107, 435, 438, 520, 753, 1163.

る。1970年からパリ秘密交渉でキッシンジャーの相手であるレ・ドクトとの間の仲介役を果たし、また駐仏の中国大使との間の連絡役も務めている。夫人のクロードは1950年代ハーヴァードでキッシンジャーの学生だったというおまけまでついている³⁰⁾。

ワシントンからのイニシアティヴに対して、中国側の反応は鈍かった。プロレタリア文化大革命（文革）は少し下火になっていたが、米国への対応については、北京の指導部内で分裂があったし、全体的に懐疑的であった。イデオロギー的なしこりが残っていた。しかし最終的には毛澤東が決裁した。かれを動かしたのは言うまでもなくソ連からの脅威だった。68年夏のチェコスロヴァキアへの軍事介入とそれを正当化する「制限主権論」（ブレジネフ・ドクトリン）、それに69年3月に2度にわたり、そしてまた7月に発生したソ連との軍事衝突だった。米国の偵察衛星は中国側の敗北を示していた。

米国側では「百万人委員会」（the Committee For One Million Against the Admission of Communist China to the United Nations—略称“the Committee of One Million”）などの“チャイナロビー”の勢力は衰えつつあった。とは言え、閣内でもアグニュー（Spiro T. Agnew）副大統領は対中強硬派。ロジャース（William P. Rogers）国務長官は慎重派でかつ台湾に同情的なところがあった。

米国側を勇気づけたのは、中国側の見解を伝えるヤヒヤ大統領からのメッセージをヒラリー大使が直接、キッシンジャーの忠実な補佐官であるヘイグのところへ運んできたことだった。1970年2月23日のことである。

1. かれら〔北京〕はもはやヴェトナム戦争が〔米中〕両国の障害とはならないこと、
2. かれらは、もはや米ソがアジアで共謀して中国にあたるとは心配していないこと、

の2点を挙げ、ヤヒヤは次のようにコメントしている。中国側のワシントンからのイニシアティヴへの対応は極めて慎重である。しかし両国を分かちすべての事柄について意味のある対話をする方向に傾いている³¹⁾。

30) Karnow (1984) 597, 684ほか; Kissinger (1979) 277ほか。

しかし、ホワイトハウスを真に喜ばせるメッセージは70年12月9日のものだった。ヤヒヤの11月の訪中後のことで、ヒラリーはキッシンジャーに文章を手渡す許可を得ていないため、内容を口頭で伝えた。周はニクソン大統領の特使を北京へ歓迎するとしたうえで、これまで様々なチャネルで連絡が来たが、これが初めての“from a Head [ニクソン], through a Head [ヤヒヤ], to a Head [周]”のものである、と中国の友人ヤヒヤからのものであることを重視することを示していた。これは単なりシグナルなどではなく、「周からニクソンへの公式で個人的な回答だった」。キッシンジャーは早速、12月16日に周への回答をヤヒヤへ渡すようヒラリーに手渡した。無地の便箋に署名もないタイピングしただけのもので、内容は次のようなものだった。米国は両国の間に横たわる台湾問題も含めた幅広い分野で、北京での高級レベルの会談に応じる用意がある。米国は東アジアと太平洋から兵力を削減しようとしている³²⁾。

このようにして事実上、北京での会談が決定された。

この間、この「パキスタン・チャネル」ばかりでなくボグダン大使を通じた「ルーマニア・チャネル」、そしてサントニーを通じた「フレンチ・コネクション」も作動していた。しかし結論として、米国は「パキスタン・チャネルの方をわずかながら好んでいた。」なぜならば、対ソ関係でパキスタンの方がややこしくなかった。ルーマニアは逐一ソ連に報告をせざるをえなかっただろう、とキッシンジャーは記している³³⁾。71年5月にキッシンジャーの補佐官のひとりであるロードは「これまでにパキスタン・チャネルが最も生産的だったのは明白である」とコメントした³⁴⁾。71年末に印パ全面戦争となるが、ニクソン政権は「パキスタン寄り」との批判を受ける素地はこうして作られた。

70年12月28日にエドガー・スノウのことがあり、71年4月には「ピンポン外交」

-
- 31) Memorandum for the President from Kissinger "Messages from President Yahya on China" (Hand Carried to Gen. Haig) (2/22/70) COOKIES II Box 1032.
 - 32) Hilaly dictated the following in Kissinger's office at 6:05pm Dec 9, 1970; Memorandum for Record (12/16/70) Col. Richard T. Kennedy. いずれも Miscellaneous memoranda Box 1033; Kissinger (1979) 700-702.
 - 33) Kissinger (1979) 704.
 - 34) Memorandum for Kissinger from Lord (5/12/71) "Exchanges with China" COOKIES II Box 1032.

が展開されたのは、周知の如くである。

この間、ニクソンは議会あてに第2回目の「外交政策報告」(2/25/71付)を送った。このなかで、中国の正式呼称が使われた。米国の公式文書では先例のないことだった。中国との交流を広げることが提唱された³⁵⁾。

ピンポン外交を受けて行われた記者会見(4/29/71)で、ニクソンは「大陸中国には行きたい、いや、いつか何らかの資格で行くつもりだ」と語った³⁶⁾。

ニクソンはそれより少し前にも中国訪問の希望を婉曲に表明していた。1971年4月16日に新聞編集者協会の年次大会での質疑応答の際、長女トリシア(Tricia)が6月に結婚することに触れたあと新婚旅行にも話が及び、記者から、どこに行かせたいかと問われた。ニクソンは少し考えたあと「そうだなあ、アジアが良いよ」「われわれの生きている間に、早ければ早いほどよいが、偉大な都市や人びとを見に中国に行ければよいな」と答えている³⁷⁾。

偶然かどうか、そのあとパキスタン経由で4月21日付の周からのメッセージがキッシンジャーに27日に届けられた。米国の要人を歓迎するというものであった³⁸⁾。

V “POLO” I

米中双方で高級レベルの話し合いが合意されたあと、米国側はさらに具体的なプランを示しながら「チャイナ・イニシアティヴ」を続けた。

ヒラリー大使が4月27日に周がヤヒヤにあてたメッセージをキッシンジャーへ

35) Statement by the President (4/14/71) Exchanges leading up to HAK trip to China December 1969-July 1971 For the President's File — China/Vietnam Negotiations NSCFC Box 1031; Kissinger (1979) 707.

36) The President's news conference of 4/29/71. China — Public and Private moves toward a Presidential Visit 1970-1971 For the President's File — China/Vietnam Negotiations NSCFC Box 1031.

37) American Society of Newspaper Editors The President's remarks at a Q & A session with a panel of 6 editors and reporters at the Society's Annual Convention (4/16/71) China — Public and Private moves ... Box 1031. Also see *Public Papers of the Presidents of the United States, Richard Nixon, 1969* (Washington, D.C.: United States Government Printing Office, 1971) [以下PPPと略記] 544.

38) Message from Chou En-La dated 4/21/71 (delivered to Kissinger 4/27/71) China — Public and Private moves Box 1031.

伝えに来た。周のメッセージは先ずヤヒヤに米国からのメッセージを届けてくれたことへの謝辞から始まり、かなり具体的な内容を含んでいた。中国側は米大統領特使（例えばミスター・キッシンジャー）、あるいはロジャース国務長官、あるいは大統領閣下自身、北京へ来てほしいというものだった。米国側の提案である第三国での会談場所としてのノルウエーやパリには言及されていなかった。ニクソンとキッシンジャーは特使を送ることを念頭に置いていた。最有力候補は前駐英大使のブルース（David K. E. Bruce）だった。かれへのニクソンやキッシンジャーの信頼には絶大なものがあつた。しかし、かれはこのときヴェトナム和平交渉の先頭に立っていた人物なのではずされた。次にロックフェラー（Nelson Rockefeller）ニューヨーク州知事、ブッシュ（George H. W. Bush）国連大使、リチャードソン（Eliot L. Richardson）国務副長官など。さらには、デューイ（Thomas E. Dewey）元ニューヨーク州知事で、1948年大統領選挙の共和党候補の名まで挙げた。ニクソンは「チャイナ・イニシアティヴ」から国務省をはずしたがっており、ロジャース国務長官は問題外だった。こうした消去法のと、キッシンジャー自身の売り込みもあつて、結局、キッシンジャーに落ち着いた（しかし、ニクソンがキッシンジャーに対して複雑な感情を抱いていたことは誰しも証言しているところである）³⁹⁾。

中国側からの回答にはいつも時間がかかり、じらされるので、こちらもすぐに飛びついたとの印象を与えたくなかつた。例えば、キッシンジャーからニクソンへあてたメモランダム（1/12/71付）の片隅に「こちらがあまり乗り気（too eager）に見られるかもしれないことは確実だ。冷まそう。こちらのイニシアティヴに向うが反応するのを待て」とニクソンが手書きで書き込んでいる⁴⁰⁾。しかし、具体的プランは大急ぎで進めた。中国への回答は「パキスタン・チャネル」を通して、5月10日の週の間届くようにした。その草稿は念入りに練られた。第4草稿のあと最終稿が完成した⁴¹⁾。

39) Telecon Nixon/Kissinger 8:28 pm 4/27/71 Exchanges leading up to ... Box 1031; Kissinger (1979) 713-718. Dallek (2007) 288-289も参照。

40) Memorandum for the President from Kissinger (1/12/71) "Conversation with Ambassador Bogdan Map Room 1/11/71" China — Public and Private moves Box 1031.

「キッシンジャー博士を特使として歓迎する」との待ちに待った中国側からの回答は6月2日、ヒラリー大使によってもたらされた。ニクソンはニカラグアのソモサ (Anastasio Somoza) 大統領のための晩餐会を開いていたが、その終りがキッシンジャーには待ち遠しかった。ニクソンも大喜びで、キッシンジャーとブランディーで祝杯をあげた⁴²⁾。

この間、急ピッチで具体策が練られていた。パキスタンの北京へ飛行距離で適当な場所としてイスラマバード、またはラウルピンディに絞られた。キッシンジャーの訪中は帰国後まで極秘裡に実行される。キッシンジャーがイスラマバードで仮病を使うシナリオもできた。そのためには、現地の米国大使館の誰かの協力が是非とも必要となった。キッシンジャーは国務省に内密に米国の駐パキスタン大使を務めているファーランド (Joseph Farland) にコンタクトをとった。「私の脇道旅行 (side trip) は7月9日-11日に確定しました」と伝え、また「[主要旅行者] (A Principal Traveler) には貴殿の言われる通り、帽子とサングラスが必要です」とも述べている。この「主要旅行者」がキッシンジャー本人のことか、それとも“替え玉”のことなのかは不明である⁴³⁾。

キッシンジャーは海軍作戦本部長のザムワルト (Elmo R. Zumwalt) 提督を通じ、カラチの総領事館付武官に連絡を取り、カラチの海軍関係者の誰かに訪中の際の通信などの技術的問題を扱ってもらうことにした。そしてファーランド大使には口実をもうけて、カリフォルニア州パームスプリングスに休暇中のキッシンジャーに会いに来てもらうよう依頼した。ファーランドは家庭に急用ができたという理由で本省から帰国許可をとり、誰にも悟られないように、キッシンジャーとの会合を5月7日に実現した。目下「東パキスタンの問題〔独立運動〕が発生しているので、パキスタンの諜報機関が目を光らせています」と告げている⁴⁴⁾。

キッシンジャーの極秘訪中は13世紀末に北京まで旅した有名なヴェネチア人

41) キッシンジャーがヒラリーに5/10/71 12:00に手渡したメッセージの本文；ニクソンは周からの4/12付メッセージを注意深く検討。いずれも Exchanges leading up to ... Box 1031. Kissinger (1979) 718.

42) Nixon (1990) 551; Kissinger (1979) 726-727.

43) Kissinger to Farland (6/22/71); Ref Islamabad 1011 n.d.; いずれも Exchanges leading up to ... Box 1031.

冒険家の名に因んで“POLO”の暗号名が付された。出発当日の7月1日午前約2時間もかけてニクソンはキッシンジャーに大統領執務室で作戦を指示した。ヘイグが陪席しているのでこのときのメモランダムはヘイグの作成したものであろう⁴⁵⁾。

以下、すべてニクソンがキッシンジャーへ申し付けた事柄である。

○〔向うで〕キッシンジャーが日本のこれから進む方向性が〔中国にとっては〕脅威となるかもしれないことを強調すること——これは重要だ。

○ 米国が日本から撤兵した場合の日本に対しては、アジア諸国が不安に感じることを中国は認識すべきである。

○ 日本人が軍勢力を再建する気になれば、明らかに、短期間にそうする能力、リソース、ノウハウをもっている。

○ 米国が日本から全面撤退すること、またはアジアで米軍の配置の仕方を誤ると日本の戦闘性が復活し、すべての国にかなりの危険を与えることになる。

○ レアード (Melvin R. Laird) 国防長官とアグニュー副大統領が〔突如〕訪台をキャンセルしたことについては、トーンダウンすること。

○ 中国との交渉の際、台湾を売り渡すようなやり方はするな。台湾についての譲歩はできるだけあいまいにしておけ。

○ 台湾には永久に米軍を駐留させておくつもりはない。駐台米軍兵力のうち6000はベトナム戦争のためである。1950年のトルーマン大統領声明〔この年1月、トルーマンは中国問題不関与を声明した。しかし朝鮮戦争が勃発すると、米国は第7艦隊を台湾海峡に派遣し、海峡の「中立化」を図った。この1970年はその20周年に当たっていた〕には私はもともと賛成していないが、そのことについて

44) Back Channel Top Secret/Sensitive/Exclusively Eyes Only 5/3/71 Kissinger to Ambassador Farland Islamabad; Memorandum for the President from Haig (5/4/71) “Meeting between Dr. Kissinger and Ambassador Farland Top Secret Exclusive For Capt Draz n.d.; Memorandum for the President from Kissinger (5/15/71) meeting with Ambassador Farland, May 7, 1971 などいずれも Exchanges leading up to ... Box 1031; Kissinger (1979) 721-722.

45) Memorandum for President's Files (7/1/71) “Meeting between Nixon, Kissinger and Haig, Thursday, July 1. Oval Office” ; ほかに例えば、Dallek (2007) 292 など。レアードとアグニューの訪台キャンセルには Kissinger (1979) 729 が触れている。

てこちらから言い出すな。

このようにニクソンは“日本カード”を切ることをキッシンジャーに指示したのである。

ニクソンは1969年7月の「グアム・ドクトリン」（翌年には「ニクソン・ドクトリン」と改称）では、アジアでの米地上軍のコミットメントを低下させ、現地地上軍の増強を求めている。これに照らしても、またその年11月佐藤総理との日米首脳会談での会話からも、日本の兵力増強を求めていることは明らかである。ニクソン個人は、日本の核保有まで容認していたとの憶測も可能であると筆者は考えている。従って、上のキッシンジャーへの指示は、中国が反対し、その廃棄を求めている日米安保条約の有用性を論拠づけ、また日本への米軍駐留を正当化するための議論だった。北京政府は1969年11月の日米首脳会談のあとの共同声明に「台湾条項」と「韓国条項」（後述）が入ったことに変態神経質になり、これは日米安保のアジアへの拡大であると断じた。11月28日付『人民日報』は「米日反動派の悪辣な陰謀」と題した社説で、佐藤訪米を非難。「日本が米国の世界戦略のなかで、アジアにおける憲兵の役割を担い、日米軍事同盟の強化によって新たな侵略戦争を目論んでいる」と。周恩来総理は70年4月7日に北朝鮮を訪問した際には、共同コミュニケで「アメリカ帝国主義の下に、すでに日本軍国主義が復活した」と断じた。4月14日には、日本国際貿易促進協会など7団体と中国国際貿易促進委員会の共同声明で「日本軍国主義がすでに現実の危険」になったと警告した。さらに、11月1日に日本社会党第5次訪中団に対しても「アメリカ帝国主義反対」「日本軍国主義反対」「日米安保条約破棄」「日台条約廃棄」などで合意を求めている⁴⁶⁾。

このような中国（すなわち周）を相手に交渉に臨むキッシンジャーに対して、ニクソンは対抗策を授けたと言うべきであろう。実際にキッシンジャーの訪中では、あとに見るように、このラインでの応酬になった。翌72年2月のニクソン自らの訪中でもニクソンは同様の見解を中国側に売り込んでいる。いわば、“日本カード”を切ったのである。このあと、中国は日米安保に反対しなくなったばかり

46) 池田（2004）289-290；林（Lin）（1997）191-195。また古川（1988）も参照。

りか、ソ連からの脅威に対抗するためにもむしろそれをプラスと考えるようになった。また田中角榮政権の手による「四次防」にも異論を唱えなくなる。

この出発当日のニクソンとの話し合いに先立つ10日前の6月21日の大統領あてメモランダムでキッシンジャーはA.「日本」B.「ソ連」の2つの項目に関して中国側と自分がどのように議論するか交渉ポジションを説明していた⁴⁷⁾。

A. 「日本」—

「アメリカ帝国主義の扇動により、日本の軍国主義が復活している」との中国の絶えざるプロパガンダに対して反論する必要がある。客観的にみて、島国である日本は外への膨張傾向を有し、また軍事大国になる能力もある。しかし、日本の政治家たちは戦争体験から軍事大国化することは自殺行為になることを自覚しているし、それに加えて、日米安保関係はこの日本の軍事大国化への傾向を封じ込める効果を持っている。このことを言い換えれば、アジアにおいてバランスをとっている勢力としての米国がこの地域から出て行くことは、それこそ日本が自衛のために急速に軍事化し、核保有をすることになる。したがって、日本が危険な方向に進まないことを望む点で中国と米国の利害は一致している。

B. 「ソ連」—

米国は〔米中交渉と平行して〕ソ連とも交渉を進めようとしている。しかし、このことは中国の利益を損なうものではない、また〔米ソが〕中国を相手に共謀することはない。

キッシンジャーはいよいよ“POLO”を実行に移す。3人の有能な部下を伴い、オンボロで乗心地の悪い航空機⁴⁸⁾でアンドリュース空軍基地を7月1日夜の8時頃に飛び立った。世間の目（とくにマスコミ）を欺くために、表向きはあくまでも「世界旅行」となっていた。実際には、7月29日から31日までの48時間の北京滞在のために12日間を費やすことになった。

途中、イスラマバードでのキッシンジャーの仮病、“替え玉”などについては、

47) Review of U.S. and PRC Views on Other Great Powers (6/21/71) POLO I [Briefing book for the President] July 1971 For the President's Files — China /Vietnam Negotiations NSCFC Box 1032.

48) Kissinger (1979) 729. 高名な大統領研究者ダレクはこれをニクソンのキッシンジャーへの妬みのせいではないかと説明している。Dallek (2007) 29.

スパイ小説のような筋立てなので、すでに語り尽くされた観がある⁴⁹⁾。

北京で実際にキッシンジャーと周が何を話し合ったかについては、僅かな非公開部分を除いて、2種類の会談議事録の形で残されている。ひとつは時系列の通常の型のもの⁵⁰⁾でおよそ164頁あるが、もうひとつ、これを人為的に“項目別”に切り貼りしたおよそ174頁のもの⁵¹⁾もあるからである。大統領やキッシンジャー補佐官をはじめ他の関係者への便宜のための作業の結果であるが、ロードを中心に北京に同行した他の2人、ホルドリジとスマイザー (W. Richard Smyser) が総力を挙げて作り上げたものと思われる。(他のNSCスタッフには“POLO”は秘密にされていた)。11項目ある北京会談での最大の 이슈は「台湾」および「インドシナ」だった。本稿では「日本」と「台湾」に焦点を絞ることとする。

北京会談に実際に立ち会い、議事録作成の中心的存在となったロードは、周の日本問題についての異常なまでに強い危惧(恐怖ともいえるもの)について今更のように驚かされている⁵²⁾。

上述のように、出発前にキッシンジャーがニクソンにメモランダムを提出し、またニクソンからもどう対応するかの指示をキッシンジャーに与えて、“日本軍国主義”の問題に対応する心構えが出来上がっていたキッシンジャーにとっても、実際に周の口から飛び出してくる言葉の過激さは、驚きだったのではないだろうか。

経済大国化した日本が「四次防」を掲げ軍事大国化していること、日本は対外膨張の性向を有するので、米軍が台湾から撤退した場合、日本が代わりに台湾に軍を進め、駐留するのではないか。周がこのことを言う背景には、1969年の日米首脳会談の日米共同声明(11/21/69)のなかで、「韓国の安全は日本自身の安

49) 早い時期のジャーナリスト兄弟の手になる書はかなり正確で断然面白い。関係者へのインタビューに基づいたものと思われる。Kalb and Kalb (1974).

50) POLO I RECORD July 1971 HAK Visit to PRC For the President's ... Box 1032.

51) POLO I PEKING MEMCONS (by Subject) July 9-11, 1971 For the President's Files ... Box 1032.

52) Memorandum for Kissinger from Lord (7/29/71) "Memocon of Your Conversations with Chou En-lai" (July 10, afternoon, dinner and evening session); 同 (8/6/71) (July 10 afternoon session), いずれも China memocons & memos — originals July 1971 For the President's Files ... Box 1033. ロードは "Chou's extraordinary preoccupation with Japanese militarism" なる表現を使用している。

全にとって緊要（essential）である」また「台湾地域における平和と安全の維持も日本の安全にとって極めて重要な要素（a most important factor）であるとの文言を盛り込んだことがある。この「韓国条項」と「台湾条項」は佐藤の帰国後、野党からも厳しく批判された。佐藤は「台湾条項」は「一言多かった気がする」と、のちに国会答弁で述懐した⁵³⁾。

日米が日本海で軍事演習をしていること、さらには、米国がソ連、日本などと組んで中国を分割するのではないかとまで周は口にはしている。レアード国防長官は7月4日に来日したが、日本は自衛のための核武装も考えるべきであるとの発言をしたと伝えられており、周はとてもこのことを気にしていた。

台湾について。周によれば、蒋介石の性格からすれば、ソ連や日本と組むこともやりかねない（すでに日台条約がある）。中国は台湾の独立は絶対に認めない。

こうした周の立場に対し、キッシンジャーは次のように応答している。日本の軍事的膨張を望まない点では、米中両国の利害は一致している。米日同盟関係は日本の侵略的政策の歯止めとなっている。台湾の米軍の3分の2はヴェトナム戦争のためのものなので、徐々に撤退可能である。

日本の事柄に関しては、(1)キッシンジャーが周に調子を合せている、(2)ニクソンからの事前の指示に従い、安保条約擁護のために（ないしは米軍の日本駐留を正当化するために）、必要以上に、中国側に日本に対しての恐怖心を煽る、の2つのことが考えられる。しかし、キッシンジャーの“日本嫌い”は知る人ぞ知るであり、ユダヤ難民のかれが、ナチス・ドイツと軍事同盟を結び、アジアに侵略した日本に対しては、キッシンジャー自身、不信感が強く、それが周との会話のなかに滲出している、とみるのは筆者のこの思い過ごしであろうか。

フランスの女性ジャーナリストに1969年または1970年に語ったとされるキッシンジャーの言葉はやはり筆者のこの疑念を深めるものである。「日本人はあと10年くらいのうちにきわめて国家主義的になる可能性がある。わたしは日本人を潜在的に、ドイツ人よりもはるかに恐ろしいと信じている。今日のドイツについての唯一の危険は、彼らの不安感であろう。しかし、日本人は自己中心にもの

53) 松尾（1972）276.

を考える。」⁵⁴⁾

最後に残された議題は、今回のキッシンジャーの極秘訪中と、ニクソンのこれからの訪中を世界に向けて、米中で同時発表する際の、文章の内容と発表のタイミングであった。この発表を米国側は“Announcement”と表記し、中国側は「公告」と表記している。話し合いは、キッシンジャー・チームと葉劍英 (Yeh Chien-ying) 中国共産党軍事委員会副主席のチームの間で、予定の最終日である7月11日未明と出発の近づいた午前に行われた。10時半には周も加わった。

たかが「発表」。ところが、この文案作成に随分と時間とエネルギーが費やされている。両者の微妙な“ずれ”を調整するためだった。7月9日会談で、中国側は首脳会談が米国側の要請によるものであるとの建前をとった。これに対し、キッシンジャーはそれでは首脳会談は無しにして、実務レベル会談にしよう、と応酬したため、翌日、中国側が折れた、といういきさつがあった。まさに国家の面子をかけた折衝である。

中国側—米大統領が招待を希望したことを示したい。

米国側—大統領訪中を提案したのは中国の方である。

中国側の“desire to visit”に対して、米国側は“interest in visiting”を示した。“desire”は「願望」という強い意志表現である。結果は“expressed desire” (表明された希望) (中国語—「表示希望訪問」) と、中国側の立場に近いものとなった。この前に置く言葉として、中国側は“in view of” (鑑みて) を主張したが、米国側の“knowing” (知り) が取り入れられた。

もうひとつは、中国側の最初のドラフトに「関係正常化を話し合うために」とあったが、米国側は、より広く双方の関心事を話し合うため、を主張。両方とも採用された。

54) 出典はユヌベル (1972) 26. ほかに、筆者は一次資料のなかに、「日本は軍国主義から民主主義へと一夜にして変身した。(今度またいつ変わるか分ったものではない)」との趣旨のキッシンジャーの発言をいくつか見た記憶がある。またキッシンジャーの言ったとされる次の一節がある。

「日本は哲学的確信なしに変る国だ」「日本は本格的に再軍備すれば、世界で一番になるだろう」。国正 (1999) 14, 306に引用。Kissinger (1994) からまかれの対独、対日不信感が感じとれる。ドイツへの不信感についてもユヌベル (1972) 111.

最後に、ニクソン大統領の訪問の時期。中国側―来年の「春」。米国側―来年の「5月以前」。米国案が受け入れられた。とにかく、1972年は米大統領選挙（11月）の年であり、あまりずれ込むわけにはいかなかった。

また、“with pleasure”は読みようによっては、「喜び勇んで」「いそいそと」のニュアンスもあり、米国側には抵抗感があったようだが、この語は挿入された。そして最終案となる⁵⁵⁾。

VI 「ショック」I

昼夜を分かたず行われたと言っても過言ではない過酷な交渉を終えて、キッシンジャー一行はイスラマバードへ戻る。キッシンジャーの旅はここで終らず、この後、テヘラン経由でパリへ飛び、北ヴェトナムのレ・ドクトを相手に3時間のヴェトナムについての秘密交渉を行っているのだから、凄い。このとき48歳。“働き盛り”と言うべきか。（この後、7月25日にはまたパリへ飛び、極秘裡に中国の駐仏大使である黄鎮に会っている。このときウォルターズ少将が根回しをした⁵⁶⁾。

南カリフォルニアのエルトロ海兵隊基地にキッシンジャーが降り立ったのは、現地夏時間、7月13日午前7時だった。そのままサンクレメンテの「西部ホワイトハウス」で待ち焦れているニクソンのところへ直行。すでにキッシンジャーの会談「成功」は、アルキメデスの“Eureka”の暗号で、報告済みであった。ゴルフカートで出迎えたニクソンに対してキッシンジャーは7時20分から9時半まで朝食を共にしながら口頭で詳しく報告した⁵⁷⁾。

キッシンジャーは帰途の飛行中に地上のホワイトハウスで留守番中のヘイグと交信していた。交信にはヘイグの考案した暗号が含まれていた。“leader”はニクソン、“guest”はロジャース。“messenger”は不明。ヘイグを指すのか？この頃、除けもの扱いで不機嫌だったニクソンの古い友人ロジャースにニクソンは少し

55) 註50を参照。BOOK I HAK's 1971 visits by subject matter [part I] For the President's Files (Winston Lord) China Trip/Vietnam NSCFB Box 846. “Announcement” (「公告」) 最終案の邦訳は毛里和子のものがある。毛里/増田 (2004) 100.

56) Walters (1978) 529.

57) Kissinger (1979) 755-756.

「消毒された」情報を与え、かれをサンクレメンテの客として遇していた。まさにかれは西部ホワイトハウスの“guest”だったわけである。

キッシンジャーは使命を果たした高揚感のなかで、すでにその歴史的重要性を意識しつつ、機中からヘイグに次のように伝えている。今回の会談は私の大統領補佐官としてのこれまでの経験のなかで「最も厳しく、重要で、広範囲に及ぶ影響力をも持つ」交渉だった、と⁵⁸⁾。

逐一、簡単な情報がキッシンジャーからヘイグにもたらされたが、7月11日付でヘイグはニクソンあてメモランダムをしたため、2点伝えている。

- (1) 「発表」はワシントンD.C.時間の7月15日午後10時30分(米中同時発表)、
- (2) 大統領の訪中は「1972年5月以前」(71年12月以降)。

キッシンジャーには口頭での報告のあと、大統領あて報告書作成の仕事があった。実際の作成にはロードが当たったと思われる。上述の“項目別”議事録は、このための下準備だったとも考えられる。「報告書」は「私の周恩来との会談」と題された7月14日付の26頁にまとめられたもので、キッシンジャーからニクソンへのメモランダムの形をとっている⁵⁹⁾。キッシンジャーはその「報告書」の冒頭にヘイグに伝えた「最も厳しく、重要で、広範囲に及ぶ影響力をも持つ」の言葉を置いた。

キッシンジャー(実際にはNSCのスタッフ)には別に、ニクソンが7月15日にカリフォルニア州バーバンクのNBC放送局から行う短いスピーチの草稿作りがあった。さらに、ニクソンのスピーチの直前に関係諸国のワシントン駐在大使に電話連絡をする手順を決める仕事もあった。この連絡作業は「ゲーム・プラン」と名付けられた。連絡先は18か国。誰がどこの在ワシントン大使に何時に電話を入れるかの役目が当てがわれた。國務長官であるロジャースが立場上一番損な役割を演じた。かれは台湾(大西洋岸夏時間午後6:45から15分間)や日本(午後7:00から10分間)を含む7か国が当てがわれた。キッシンジャーはソ連とインド。ほかの国はヘイグ、ホルドリジ、スマイザーに振り分けられた⁶⁰⁾。

58) Kissinger to Haig 7/11/71 13:30 Exchanges leading up to ... Box 1031.

59) Memorandum for the President from Henry A. Kissinger (7/14/71) "My Talks with Chou En-lai" POLO I Record HAK Visit to PRC July 1971 Box 1032.

キッシンジャーのソ連大使への電話連絡は東部夏時間の午後10時（太平洋沿岸では午後7時）にすることになっていた。ところが、キッシンジャーは独自の判断で、ドブレニン（Anatoly Dobrynin）大使をホワイトハウスの秘密の電話へ呼び出し、午前9時にサンクレメンテから直接会話をした。もともとソ連との関係を重視するニクソンは、ドブレニンを人目につかないようにホワイトハウス東ウイングの裏口からの出入りを許していた。これは国務省とは別のチャネルの存在を意味した。かれは口の堅いことでも信頼されていたし、英語が堪能なので通訳の必要もなかった。キッシンジャーのドブレニンに対する特別扱いにはこうした背景があった。サンクレメンテから戻ったキッシンジャーは7月19日、ホワイトハウスの夕食にかれを招き、改めて米中和解がソ連を標的にしたものではないことを強調し、そのほか、中国指導者が日本の急速な経済成長と核保有の可能性に神経質になっていることなど、伝えた。冷戦最大のライヴァル（そしてドブレニン個人）に対してニクソン政権は特別な配慮を日頃から示していたことが窺える⁶¹⁾。

逆に、日本の政治家、外交官に対しては、よく情報を“リーク”するという不満がニクソン政権サイドでもたれていた。ホワイトハウスではジョンソン国務次官（前駐日大使）をこの極秘事項を事前に佐藤に伝えるために日本へ派遣する案も浮上していたが、ジョンソンの回顧録によれば、「ニクソンの“リーク”に対する病的なほどの恐怖心のために」中止された⁶²⁾。

1970年10月24日の佐藤＝ニクソン首脳会談では、中国問題で、密接な協議を続けていくことが再確認されていた。しかもニクソンは佐藤に対して、「長期的には大陸中国との国交正常化は望ましいが、去年11月にも申し上げたように、いまはそのときではない。いま必要なのは断固たる態度（firmness）が必要なのです」と語り、着々と進めていた「チャイナ・イニシアティヴ」に煙幕を張った。それに先立つ同月6日の岸との会談でも、「いま、われわれはわれわれの友人〔台

60) Haig to Rogers “Consultation Game Plan” (7/15/71) China-general July-October 1971 For the President’s Files ... Box 1036. 7月15日のニクソン放送の全文はPPR 1971 (1972) 819-820.

61) Dobrynin (1995) 199-201, 226-227.

62) Johnson (1984) 554 [ジョンソン(1989) 289].

湾]に背を向けてはいけないうとミスリードしている⁶³⁾。71年4月19日付“NSSM 124”(“Next Steps Toward People’s Republic of China”)の作成者たちは、5月5日のNSC会議で、中国問題で日本に通告を怠ると、面子を失った日本の政権は倒壊するかもしれない、と論じたが、ニクソンはいっこうに気にならなかった。キッシンジャーの「世界旅行」出発の頃、レアードが来日していたことは、先に言及したが、からは佐藤に対して米国の対中政策には変化はないと念を押した。NSCにより「チャイナ・イニシアティヴ」の蚊帳の外に置かれていたレアードとしては、そのように信じ込んでいたかもしれない⁶⁴⁾。

7月15日(木曜日)夜。牛場信彦駐米大使は恒例の海兵隊レセプションに出席していたが、ロジャースから電話が入ったとの知らせで、急遽大使館に戻って連絡を受けた。時計は10時10分(サンクレメンテの7時10分)を指していた。日本では16日(金曜日)朝である。安川壯外務審議官が牛場の電話を受け、官邸に連絡をとる。小杉総理秘書官が定例閣議を終えたばかりの佐藤へメモを手渡した。世に言う「3分前」である⁶⁵⁾。

佐藤の心中は穏やかならざるものがあつたと思われるが、後世に残ることを意識していたはずの『佐藤榮作日記』該当部分では、「すなほに慶賀すべき事」と平静を装っている。ニクソン訪中の迫っていた72年1月サンクレメンテ首脳会談では、佐藤は、今や皮肉なことに米国に日中間の橋渡しを願うほかないとニクソンに言わざるを得えなかつた⁶⁶⁾。

牛場は親しくしているジョンソンに必死に電話をした。ジョンソンはサンクレメンテまで呼び出されていた。牛場が最初に叫んだのは、「アレックス、『朝海の悪夢』が現実になつた」であつた⁶⁷⁾。

朝海浩一郎元駐米大使(在任:1957年5月—1963年4月)は、ワシントン駐在當時にNational War Collegeでの講演で、ある日突然米国の対中政策が転換する

63) 佐藤=ニクソン会談の議事録はPOL Japan-U.S. 14465, October 24, 1970, 岸=ニクソン会談の議事録はPOL 7 Japan, 13562, October 6, 1970, いずれも米国務省文書RG 59。

64) Small (1999) 146. レアードは知らされていたとの説もある。Schaller (1997) 230。

65) 毎日新聞政治部 (1987) 88-92; 楠田 (2001) 614-615; 牛場 (1984) 134-135。

66) 佐藤 (4) (1997) 377; 楠田 (下) (1983) 257-258; 楠田 (2001) 824。

67) Johnson (1984) 554-555 [ジョンソン(1989) 286-287]。

不安を述べたところ、しばらくしてロンドンの『エコノミスト』誌が「ほぼ正確にその内容をスッパ抜いた」ため、このことが“*Asakai's Nightmare*”として語られるようになっていた。佐藤側近のなかでも、木村俊夫官房長官は同様の予感に悩まされたひとりだった。マイヤー（Armin H. Myer）駐日大使は散髪最中にラジオのニュースでニクソン訪中発表を知ったと伝えられている⁶⁸⁾。

キッシンジャーが「世界旅行」でイスラマバードに到着する前の7月6日にニクソンはミズリー州カンザスシティーにおいてマスコミ幹部に対して演説をした。経済問題に大半を費やしたあと、これは後知恵的になるが、「チャイナ・イニシアティヴ」をギリギリまで示唆していた。

「…わたしの政権が大陸中国の国際社会からの孤立を終了させるための初めてのステップをとることが必要不可欠です。」

「世界の指導者たちとの対話がなく、完全に孤立している大陸中国は世界全体にとって危険なことですし、許されることではありません、ですからこのステップをとらねばならないのです。」

しかし、中西部でのこの演説にマスコミは注意を払わなかった。これより前の6月30日、ある日本人外交官がホワイトハウスへ友人のホルドリジに着任の挨拶に行った。ホルドリジは忙しそうだった。翌日、キッシンジャーに随行してサイゴンに旅立つと言う。このときホルドリジは「ボクはこれから重大な旅行に出る。〔米国は〕古い友人を犠牲にしない。米国の今後の外交は〔大統領の〕カンザスシティー演説を読め」と怖い顔つきで口走った。この日本人外交官はニクソンの演説をくり返し読んだが当時の状況からして「古い友人」とは南ヴェトナム政府としか思えなかった。しかし後で、ホルドリジの友情に感じ入るとともに、自らの至らなさを悔やんだ⁶⁹⁾。実は周はこの演説に注目した数少ないひとりだった。議事録のなかで、キッシンジャーとのやりとりがある—7月9日午後の第1回目会談の終わりに近い個所に見られる。

68) 朝海（1988）120-121；千田（1987）136-137。Myer（1974）には大使館内の床屋についての記述はない。

69) *PPP* 1971（1972）802-813；Nixon（1990）552-553；毎日新聞政治部（1987）94-95；松尾（1972）274-275。

キッシンジャーの事後処理はまだ続く。7月16日午前9時15分からサンクレメンテで記者団に対してブリーフィングを行った（これを“backgrounder”と呼んでいる）。キッシンジャーにはホワイトハウスの報道官、ジエグラー（Ronald Ziegler）が同席した。キッシンジャーは冒頭、2つの条件を付けている。(1)情報源は「ホワイトハウス高官」とすること、(2)細部には立ち入らないこと——であった。話して差し支えないことはすべて誠意をもって丁寧に答えており、文書にして19頁にも及ぶ。このサービスぶりは好感を持たれたはずであり、キッシンジャーのマスコミ人気の一因を窺うことができる。

内容をつまみ喰いする。(1)何故「5月」なのかとの尤もな、しかし鋭い質問が出たのに対して、キッシンジャーは党派的な反対が強まる前に実行したいからだと答えた。(2)最も緊急な課題である「東南アジアの平和」〔=ヴェトナム〕の解決が会談の主たる目的だ。(3)今回の会談の内容はニクソンが主に決めた。(4)他人に悟られないため、ニクソンとキッシンジャーは夕食後など夜にホワイトハウスの「リンカン・シッティング・ルーム」で相談をくり返した（因みに、上記の周からの待ちに待った返事が届いた6月2日夜に祝杯を挙げたのもこの部屋だった）。(5)キッシンジャーの出発までに2局面あった。(a)一般的な枠組を確立する、(b)4月から具体的な内容に入った。そして4月にキッシンジャーの訪中が決まった。これは3か月の準備期間を意味した。(6)中国を正式名で呼んだのは、70年10月のチャウチェスクの晩餐会と71年2月の外交教書だ。(7)今回の会談は49時間の北京滞在のうち約20時間だった。(8)パキスタンが仲立ちをしたのかとの質問には答えを拒否した。

キッシンジャーはこのほかに、今回のことに関与を許されなかった他のNSCスタッフへのブリーフィングがあり、加えて、超党派議員への、また別に共和党議員へのブリーフィングもあった。ヤヒヤ・カーンへの礼状の発出の仕事もあった。この後すぐにキッシンジャーは再びパリへ飛び立つ。

国務長官の指示により、ニクソン訪中発表に対する世界中およそ考えられる国の米国の出先機関から膨大な報告電が送られている。

報告は各国のマスコミの論調や世界高官の発言などからなっているが、おしなべて“世界平和のために「歓迎」”のトーンで占められていた。日本も木村俊夫

官房長官（外相代理）は談話で「良い事」「歓迎」の言葉を用いている。韓国の朴正熙大統領は「ショッキングなニュース」としながらも、アジアにおいて平和を再建し秩序を維持するのに役立つと述べている。ソ連すらも歓迎の意を述べている。

ニクソンは東京のマイヤー大使経由で佐藤へ、日本政府の態度に感謝する旨の礼状を発信した（7/17付）。在東京の米大使館からの電信では、GM社のローチ（James Roche）会長が佐藤に会ったとき「純粹によろこんでいた」ことを伝えている。しかし米国内にも日本に多少とも同情的な論調があった。CBSテレビのラザー（Dan Rather）、*Philadelphia Bulletin*（7/27/71）、*Washington Star* (by Charles Bartlett)（8/17/81）などがそうであった。

台湾の猛反発は当然予想されたし、インドも不快感を露わにした。また北ヴェトナムは「米中結託」を攻撃している。

ホワイトハウス内でも、複雑な心境でキッシンジャーのブリーフィングを受けたものもいる。ブキャナン（Patrick J. Buchanan）やゾンネンフェルト（Helmut “Hal” Sannenfeldt）らがそうであろう。いずれも反共イデオログであり、前者は主としてイデオロギー的な立場から、“バランスシート”形式でニクソン訪中の功罪を論じているが、それは米国外交の「勝利」(victory)であるが、中国にとっては「大勝」(triumph)であると断じている。1939年の独ソ不可侵条約にもなぞらえている。米国大統領が中国側の招請を「喜んで」(with pleasure)受けることは中国の国際的地位を高めることに益するとも不満を述べている。かれはまだ非常に若く（1938年11月生まれでこのとき33歳）、大統領になる前のニクソンにニューヨーク市で秘書官として仕え、ホワイトハウスではスピーチライターとなった。のちに保守派の論客としてマスコミの寵児になる（近年は「アメリカ帝国」批判の「アメリカ・ファースト」孤立主義者に転向している）。後者はキッシンジャーの補佐官だったが、ソ連専門家の関係から、デタントへの影響に不安を感じたのではないだろうか⁷⁰。

政府内でもアグニュー副大統領やコナリー（John B. Connally）財務長官はもともと対中強硬派であった。

VII 台湾の反応

ロジャースは在ワシントンの台湾や日本の大使に電話連絡をとる任務をホワイトハウス作成の「ゲーム・プラン」によって与えられた。国務省は台湾への連絡内容のシナリオを事前に準備した。台湾に対しては、曰く、両国関係はこれまでと変わらない、外交関係も維持する、米台相互防衛条約も有効、国連議席をこれまで通り支持、「2つの中国」または「1つの中国、1つの台湾」政策は支持しない、(もし聞かれれば) 台中関係がどうなるかは、米国は関知しない、(もし聞かれれば) 台湾支配下の現在の領土に関しては、台北政府をその主権者とみなす⁷¹⁾。

ワシントンの沈剣虹 (Shen Chien-hung = James C. H. Shen) 駐米大使がロジャースの電話連絡を受けたのは発表のわずか20分前だった。台湾のマコノイ (Walter McConaughy) 米大使は知らされておらず驚いた様子だった⁷²⁾。

ニクソン訪中発表の直後の台湾の反応は激烈なものであった。楊西昆 (H. K. Yang) 外交部上務次長 (=事務次官) は米国の大使マコノイに次のように強硬に抗議した。これは「最も非友好的な行為」で「極めて深刻な結果をもたらすだろう。」そしてニクソンの訪中を「“bandits” (共匪) の支配する地域」への訪問、と形容した。嚴家淦 (Yen Chia-kan) 副総統もステートメントを発表した⁷³⁾。

事態がいくら急変しても、また台北政府がいかに激怒、失望しても台湾がソ連と手を組んだりすることは考えられないことだった。これまで通り、外交面 (国

70) Memorandum for the President from Patrick J. Buchanan (per HRH) (7/16/71) Reaction to China Initiative Memos, Letters July 1971 Box 499. これはホルドマン首席補佐官を通したもので、ニクソンの目には届かなかった可能性が高い。Memorandum for Kissinger from Helmut Sonnenfeldt (7/20/71) “US-Soviet Relations in Light of the President’s Visit to China” (for NSC) China Trip July-November 1971 [2 of 2] Box 500, とともに President’s Trip Files NSFCF.

71) Talking Points For Various Ambassadors のうち “Special Points for the GRC” China-general July-October 1971 For the President’s File ... Box 1036.

72) 松田 in 増田 (2006) 64.

73) Memorandum for Mr. Henry A. Kissinger from the Department of State (7/16/71) “Reaction to the President’s Announcement on July 15, 1971” のうち Republic of China の部分 Reaction to China Initiative Memos, Letters, etc, July 1971 President Trip Files NSFCF Box 499 Amembassy Taipei to Secstate (7/16/71) “GRC Statement on President Nixon’s Announcement of China Visit” Reaction to China Initiative Press, misc, July 1971 [1 of 2] President Trip Files ... Box 499.

連議席の問題を含め)、経済・軍事援助面でも米国に依存する以外に選択の余地はなかった。ニクソンの発表からひと月近くが過ぎた8月9日付のメモランダムでキッシンジャーはニクソンに国務省の考える台湾での反応について報告した。国務省の分析は以下のようにとても醒めたものと言える。

台湾は感情に走ることなく、国益の観点から冷静に振舞っている。米国からの軍事援助、米国からの投資や貿易、そして米国世論の反発を招きたくない、との配慮がそうさせている。

- (1) 国内の政治的混乱（クーデタ、暴動、学生デモ）の可能性は小さい
- (2) 蒋介石は引き続き、権力を掌握するだろう。ただし、かれや指導部への批判は強まるだろうし、また反体制活動も限られた程度ながら増大するだろう
- (3) 一方で、治安上の弾圧が強まり、市民的自由への制限が強化されるだろうが、他方で忠誠的（体制的）台湾人（本省人）を重要ポストにつけるだろう
- (4) 米国の大使館や他地域の外交機関への協力は減少するだろう

上記の分析のもとになったと思われる国務省によるより早い時期の分析がある。

反応として、感情的になるであろうし、政府公認のデモも行われるだろう。しかし他方、台湾自身の国益についての現実的な評価もなされるだろう。激しい反米行動が台湾経済に深刻な打撃をもたらすことも分っている筈である。

国内情勢はかなり不安定化するであろう。とりわけ台湾人（本省人）の間で動揺が大きいだろう。

しかし、徹底的な反米キャンペーンは(1)米国からの現在のレベルの政治的支持を弱めること、(2)台湾の安全保障へのコミットメントについての米国国内世論の支持を悪化させる危険を冒すことになることも自覚している筈だ。

今回のような外部からの衝撃が台湾国内に政治的動揺を引き起こす可能性は小さい。

台湾の地位の低下とそれゆえの台湾指導部の統合のシンボルの必要性により蔣の地位はむしろ強化され、かれのこのあとの政権維持には有利に作用するだろ

う⁷⁴⁾。

あとがき

このあと71年10月にキッシンジャーは2度目の訪中、そしてヘイグのテクニカルな打ち合わせのための訪中があり、翌年2月ニクソンの念願の訪中が叶った。米中首脳会談での共同声明は、台湾問題での溝は埋まらず両国の認識を認め合った形の両論併記の「上海コミュニケ」となった。台湾に関してはキッシンジャーは冷淡だったが、ニクソンにとっては辛い選択だったにちがいない。このことは2人のそれまでの経歴から当然のこととも思われる。米国は依然として、米台条約を維持し米議会は「台湾関係法」を可決し、台湾への支援を続ける姿勢をとった。

それだけに、田中角榮新政権が「スピードを重んじる」として72年9月にいっせいに日中の外交関係樹立と日台条約の破棄まで突っ走ったことに、ホワイトハウスは怒りを露わにしたのである。

本稿で、一次資料をもとに辿った「チャイナ・イニシアティヴ」の経緯を眺めると、すでに言われていることであるが、(1)ニクソンの外交好きと親中の態度、(2)ニクソン・ホワイトハウスの秘密性、(3)それゆえの国務省軽視、が明白である。また米中の両国の威信をかけ、死力を尽くしての、しかし、あくまで友好的態度を保った周とキッシンジャーとの外交交渉の記録は圧巻だった。これに付随して、米国政府の公文書についての明確な認識とそれへの真摯な姿勢にも改めて感服させられた次第である。

参考文献

Aitken, Jonathan, *Nixon: A Life* (Washington, D.C.: Regnery Publishing, Inc., 1993)

Brandon, Henry, *The Retreat of American Power* (New York: A Delta Book, 1972, 1973)

74) Memorandum for Kissinger For the President (8/9/71) "Estimate of Future Reaction to China Initiative"; Memorandum for the President from Rogers (7/21/71) "Probable GRC Reaction to Your Announced visit to Mainland,"ともに Reaction to China Initiative Memos, Letters, etc. July 1971 ... Box 499.

- Dallek, Robert, *Nixon and Kissinger: Partners in Power* (New York: HarperCollins, 2007)
- Dobrynin, Anatoly, *In Confidence: Moscow's Ambassador to America's Six Cold War Presidents* (New York: Times Books, 1995)
- Garver, John W., *The Sino-American Alliance: Nationalist China and American Cold War Strategy in Asia* (Armonk, NY: M. E. Sharpe, 1997)
- Haig, Alexander M., Jr (with Charles McCarry), *Inner Circles: How America Changed the World: A Memoir* (New York: A Time Warner Company, 1992)
- Haldeman, H.R. (with Joseph DiMona), *The Ends of Power* (New York: Times Books, 1978)
- Hoff, Joan, *Nixon Reconsidered* (New York: BasicBooks, 1944)
- Johnson U. Alexis (with Jef Olivarius McAllister), *The Right Hand of Power: The Memoirs of an American Diplomat* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc. 1984) [U. アレクシス・ジョンソン (増田弘訳) 『ジョンソン米大使の日本回想』 草思社、1989年]
- Kalb, Marvin and Bernard Kalb, *Kissinger* (Boston: Little, Brown and Company, 1974)
- Karnow, Stanley, *Vietnam: A History* (New York: Penguin Books, 1984)
- Kissinger, Henry, *White House Years* (Boston: Little, Brown and Company, 1979)
- , *Diplomacy* (New York: Simon & Schuster, 1994)
- MacMillan, Margaret, “Nixon, Kissinger, and the Opening to China” in Fredrik Logevall and Andrew Preston (eds.), *Nixon in the World: American Foreign Relations, 1969-1977* (New York: Oxford University Press, 2008)
- Mann, James, *About Face: A History of America's Curious Relationship with China, From Nixon to Clinton* (New York: Alfred A. Knopf, 1999)
- Murphy, Robert, *Diplomats Among Warriors* (Garden City, NY: Doubleday & Co., 1964)
- Myer, Armin H., *Assignment: Tokyo: An Ambassador's Journal* (Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1974)
- Nixon, Richard, *RN: The Memoirs of Richard Nixon* (New York: A Touchstone Book, 1990) [Originally published: New York: Grosset & Dunlap, 1975]
- , “Asia After Viet Nam,” *Foreign Affairs*, Vol. 46, no. 1 (October 1967) pp. 116-123

- Reeves, Richard, *President Nixon: Alone in the White House* (New York: A Touchstone Book, 2001)
- Reischauer, Edwin O., *My Life between Japan and America* (New York: Harper & Row, 1986)
- Safire, William, *Before the Fall: An Inside View of the Pre-Watergate White House* (New York: A Da Capo Paperback, 1975)
- Schaller, Michael, *Altered States: The United States and Japan since the Occupation* (New York: Oxford University Press, 1997)
- Small, Melvin, *The Presidency of Richard Nixon* (Lawrence, KS: the University Press of Kansas, 1999)
- Tucker, Nancy Bernkopf, "Taiwan Expendable? Nixon and Kissinger Go to China" *The Journal of American History* Vol. 92, No. 1 (June 2005)
- Walters, Vernon A., *Silent Missions* (Garden City, NY: Doubleday & Company, 1978)
- 朝海浩一郎『花みづきの庭にて——ある外交官の回想』朝海浩一郎回顧録編集会、1988年
- 池田直隆『日米関係と「二つの中国」——池田、佐藤、田中内閣期』木鐸社、2004年
- 牛場信彦『外交の瞬間——私の履歴書』日本経済新聞社、1984年
- 緒方貞子(添谷芳秀訳)『戦後日中・米中関係』東京大学出版会、1992年
- 楠田實編『佐藤政権・二七九七日』(下)行政問題研究所出版局、1983年
- 楠田實(和田純編)「楠田實日記——佐藤栄作総理首席秘書官の二〇〇〇日」中央公論新社、2001年
- 国正武重『湾岸戦争という転回点——動盪する日本政治』岩波書店、1999年
- 佐藤栄作(伊藤隆監修)『佐藤栄作日記』第4巻、朝日新聞社、1997年
- 張紹鐸(Zhang Shaoduo)『国連中国代表権問題をめぐる国際関係(1961-1971)』国際書院、2007年
- 千田恒『佐藤内閣回想』中央公論社、1987年
- 古川万太郎『日中戦後関係史』原書房、1988年
- 毎日新聞政治部『安保』角川書店、1987年

松尾文夫『ニクソンのアメリカ』サイマル出版会、1972年

松田康弘「米中接近と台湾——情報統制と政治改革」増田弘編『ニクソン訪中と冷戦構造の変容——米中接近の衝撃と周辺諸国』慶応義塾大学出版会、2006年

毛里和子、増田弘監訳『周恩来・キッシンジャー機密会談録』岩波書店、2004年

ユヌベル、ダニエル（井上勇訳）『キッシンジャーと私——ひとつの物語』時事通信社、1972年

林代昭（Lin Dai-zhao）（渡邊英雄訳）『戦後中日関係史』柏書房、1997年

若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』文藝春秋、1994年